我々は英國に就て信ずる。若し是が適當の時であり處であるならば諸君に劣らざる熱誠なる確信を以て、我等は信ず更に勝れる基礎を有する議論を以て國の爲めに辯ずるとも出來た。然るに此の事は他人既に試みた所であるから諸君が之を見られんことを望むのである。基督の僕たる我等は護り又た認むべき他の利害を有し一層高き忠義を負うて居る。此の大戰爭が了り直接の爭論の點に就て歷史の宣告が遂に下される時まで我等は人類の靈的利害を擁護し基督者の意識の連續を維持し雙方に於て爭の原因に加ふるに不正なる疑、惡意ある虛僞を以てせんとする人の企に抵抗し、我等と偕にあるが故に又た確に諸君と偕にありと信ずる信仰希望及び愛の精神が有効に行爲に現はるゝ其の機關たる分を全うするのが我等の義務である。諸君は此の義務を有効に果す爲めに我等と力を協す事を好まざるか。我等をして雙方の基督敎團體を代表する人々を選定せ





しめよ。而して我等の政府より兩者自由に交通する特權を要求せしめよ。斯くして雙方に存する殘酷壓制の風說を公平に調査し力の及ぶ限り之を矯正し或は賠償せしめよ。就中基督敎精神のあらゆる發表、雙方に現れたる寬大なる行爲、無私なる思想のあらゆる實例を敵國の市民に知らするの策を講せしめよ。戰時に於て基督者の間に仲保者たる義務を中立國民に委ねしめざれ。我等をして基督の體に屬する肢として直接相互に交涉する權利を要求せしめよ。』

此の如き訴は成功するにしても、せざるにしても、其の有する道德的價値は評價し難いものがあるであらう。其の調子は世界に響いたであらう。將來の敎會の爲めに一種の標準を立てたであらう。

敎會が全體として爲し得ない所のものを基督者の或る集團は既に爲しつゝある。今日基督敎に含蓄せられた世界主義を、明瞭に又た自覺的に發

表した數種の機關が活動して居る。平和協會は其の一であり、學生青年會同盟も其の一であるが、其の結果の及ぶ所最も遠大なるは外國傳道の事業である。今日の時勢に於て奬勵を與ふる一の事は、是等の運動に從事してゐる人々を結び着くる繋りが戰爭によつて制限を受けたには違ひないが、斷絶はせられなかつたことである。其の主動者の間には情意の交換が行はれた。交戰國にある同志の爲めに祈は捧げられた。今日に於ても戰爭の終り次第再び協同の事業に復る方法を盛に講じつゝある。

此の種の盡力の重要なる事を過言するは難いとである。我等は利己心が戰爭の原因であることを繰り返して語つた。併し是は要するに說明の一部分であつて、最も重大な原因を盡して居らぬ。列國は苦しむ所あるが爲に戰ふでもなく、又た貪らんとして戰ふでもなく、恐れる所あるが故に戰ふのである。獨逸を襲ふた國は無いが、他日襲はんとして居るも





のが有る爲めに戰ふと獨逸は云つて居る。英國を襲ふたものは無いが英國は獨逸に二倍する海軍を有するに非ずんば獨逸が來つて我を襲ひ滅ぼすであらうと云ふ。佛蘭西は白耳義を襲はなかつた。然れども獨逸の云ふのには、佛國が襲ふとして居ることを知つた故に先づ白耳義を攻めたと。是の如くして究極する所がない。利己心は猜疑を產み猜疑は恐怖を產む。戰爭の下に伏せる原因は彼等が過去に於て經驗した損害を記憶するが爲めでない。過去を以て未來を測り國際關係に於て昔よりも善き方に變化し得るを信じ得ないといふドグマから來る。基督敎の立つる人類同胞の原理を、事實に於て否定するのみならず理論に於て否定するに因る。

善く之に處する唯一の道は反證を擧ぐることである。我等は各國に於て實に正義を愛し慈愛を行ひ、唯他國の人民にも同一の感情の存するこ

とを確信しさへすれば、世界的改善の政策に於て彼等と協同するを喜ぶ男女の多きことに注意を促さねばならぬ。德は總て己に歸し不善は總て敵に歸せんとする誘惑に萬難を排して抵抗し、外形は種々異なるにせよ、最深なる渴望と願とに於て人類は根本的に一であることを悟らねばならぬ。

基督教會ほど此の證據を供給するに好き地位に立てるものはない。基督者にとりては人類が兄弟であることは證明を經ざる事物でない。幾度か最も確實なる性質の證據を見出したる事實である。昔より代々の教會は、福音は人種や階級の差別を超越し得る力を信じ、此の信仰の誤らざるを見出した。

千九百十六年六月七日コンスタンチノーブルに於て一女學校の卒業式が行はれた。卒業生は十九人であつたが其の中の三人は土耳其人、七人





は勃牙利亞人、三人は希臘人、五人はアルメニヤ人、一人は猶太人であつた。是等の卒業生の屬する國民は多年相敵視し、爭を干戈に訴へたことも一度ならずあつた。希臘人は勃牙利亞人と戰ひ、勃牙利亞人は土耳其人と戰ひ、アルメニヤ人にとつては土耳其人といふ名は極めて非道不人情なるものを思はしめた。然るに世界的爭鬪の嵐の眞中に於て、明日は如何に成り行くか知らざる今日に於て、彼等は教育を受けた婦人の姉妹同士の如く一堂の下に相會したのである。

是が基督教が今日爲しつゝあることであり又た爲さんとして居ることである。國民間の平和にとつて恐るべき妨である所の人種の偏見に當り、其れが必ずしも除き難きことでないことを證明して居る。人類の同胞たるを信ずる我等の信仰に、實驗上の固き基礎を供給しつゝある。

戰爭の始つた頃此の爭が基督教傳道の上に及ぼす影響の不良ならんこ

とを恐れた。國内に於てさへ戰爭は信仰を困難ならしむる一挑戰たりとせば、まして基督教を知る日尚ほ淺き信者には一層惡しき打擊たるべきを期待されぬでもなかつた。

心配した此のことは事實とならなかつた。戰爭は信仰を搖かしたが、併し其れは基督教を信ずる信仰ではない。基督教國たりと標榜せる西洋諸國民の信ずる信仰を動搖させたのである。幼き時から歐羅巴或は亞米利加で生長した人には西洋文明と基督教とを一つに見るは自然の事であり得る。併し基督教が無私なる奉仕と犧牲的愛の本職を以て來つた日本支那の基督者は二者を混ずる事は出來ない。失敗したのは基督教でなく誤つて基督教的と稱して居る文明の失敗であることは彼等の明に了解する所である。純然たる物質文明の破滅は講堂の辯證論よりも一層有力に證明せられた。





此の悽愴なる背景に反映して、基督教精神の美は一層純粹に輝くのである。爭ひ最も猛烈なる所に此の障壁を越えて愛の流るゝを見る。クリスマスの日、英獨の兵隊が塹壕を出でて交歡したといふ話に類する事は顯はれぬにしても少くない。白耳義に在る若き英國の武官の手紙から余は數行を引用する。

一夜四人の獨軍の狙擊者が鐵條網にかゝつて擊たれた。翌朝我が軍の兵士が出て手の屆き得る所に倒れてゐた一人を運び來つて之を葬つた。我が兵士に爲すと同じ尊敬と悲哀を以て之を執り行ふた。余は翌朝行いて此の墓を弔ふたが、余の隊に屬する最も朴訥な一人の兵士は其の墓上に十字架を立てゝ其の上に記して曰く

此處に一人の獨逸人は横はれり

我等は其の名を知らず、

彼は其の祖國の爲めに
勇しく戰ふて死せり。

其の下に『神我等と偕に』といふ意味を、間違のある獨逸語で加へてあつた。

近頃獨逸の塹壕を襲擊して負傷した佛兵が次の事を語つてゐる。『私の近くに重傷を負ふた二人の兵士が倒れてゐた。一人はババリア人で髮の美しい青年であつたが、胃の所に傷口が開いてゐた。一人は年若き佛人であつたが脇腹と頭とを打れてゐた。二人とも最早死期も近く顏の色は次第に蒼めた。見れば佛兵は何か微弱ながら運動を始めた。手を外套の下に入れて懷中に藏めてあるものを探す樣であつたがやがて小さい銀製の十字架を取り出して唇に押し當て、力なく然かも明瞭に「惠深きマリア樣」と唱へ始めた。すると其の目も見えずなりかゝつたババリア人は青き目





を開いて佛人の方に頭を向け、憎みの樣は少しもなく愛の情を表はして此も口の中で「神の母聖なるマリア樣、今死んとする此時我等罪人の爲めに祈り給へ」と祈つた。二人は目を見合して互に理解した。彼等は同じ災の中に倒れて然かも信仰を以て死んと願ふ二人の友であつた。佛人はババリア人に十字架を差し出すと、一方は之に接吻し手を握つて「我等お互に國家の爲めに盡した上は仲好く神の御許に行かう」。』（「クリスチアン・ウォーク」より）

此の如き物語は之を千を以て數へるほどもあらう。戰意、鬪心の下にもつと違つた或物を得たいといふ渴望がある。新しく且つより善き生活を得たいといふ渴望、是は言ひ現はすには餘り深いもので、或る適當なる時期を得て之を行爲に結晶させやうとして居る。

此の渴望に聲を與へ、此の戰によつて靈的理想の爲めに得られたる所

得を證明する事實を全人類より集め、最後の勝利の望を掲げるのは教會の任務である。

斯く云へばとて我等は人類を理想化し、人事に於て跋扈して居る無知と薄弱とに對して目を閉づるといふ意味でない、之に反して基督教の結果は罪の意識を强烈にし、個人の失敗に下されたる審判を嚴しくすることである。されど我等の下す審判は基督教的の審判であらねばならぬ。他の人を審判するに當り自ら同じ罪を犯したならば我等自らも斯く審判せられんと望む如くであるべきである。我等も亦た惡を行ひて悔いしことを記憶し、我等の罪の赦されたらんことを望むものである。自ら望む所之を人に拒むべきではない。何處の國民も其の心の底には正義の何物たるを知り得れば之を行はんと欲する願あるを信じ、且つ孰れの國にも善意の力は結局惡の力よりも强きことを信ぜねばならぬ。あらゆる失望もあり





一時の失敗もあるに係はらず、我等は確く信ぜねばならぬ、交戰中の各國を築き立てたる見事なる性質は今回の戰によつて消耗せられたでなく、我等が神の國と呼ぶ大なる國家の建設に於て効すべき分あることを。

コンスタンツの平和會議から歸つた旅客が彼等を國境まで送ることをカイザルから任ぜられた獨逸の武官に出逢ふた時其の武官は是等の旅客が獨逸に來つた用向を聞いた時笑を禁じ得なかつた。然れども最後に笑ふ人が最も好く笑ふ人である。人は單に獨逸人でもなく英人でもなく又た白耳義人でもなく、女より生れ神の子供であり、耶蘇基督の兄弟なる人である。戰爭は平和の時に劣らず此の課程を教へ得る。今日亦た實に之を教へつゝあるのである。多くの病院に於て、多くの戰場に於て、人類の愛は人種の隔てを超越し、今しがたまで死力を盡して格闘した人々を、基督の名は兄弟となすのである。此の愛の奉仕は何時かは果を結ん

で「理想の衝突」は「犧牲の和合」の中に融け去らん。

## (三)靈的冒險の誘導として觀たる傳道

戰時に於て教會の爲し得る事は要するに限られて居る。我等が觀た如く、基督教の關する所は戰爭を生んだ原因であつて、能く之を處理する途は唯だ平和の時にのみ存する。既に人と人とを結び合はして居る紐帶を認むるだけでは足りない。我等は其の數を增し、其の力を强めねばならぬ。之を爲すには、興味を喚起すべく、共通の忠義心に訴ふべき或る共通の目的を與へるより外はない。

此の點に於ても亦教會は策戰の要地を占めて居る。何となれば外國傳道が斯く統一する目的たり得るからである。教會は單に神に對して共通關係を有することを意識した禮拜者の一團であるばかりでなくして、併





せて又世界的經綸を實行すべき傳道的團體である。教會は基督が啓示した理想に隨つて世界を改造する爲に存し、人類の爲に共同の業を爲す養成所である。

此の貢獻の重要なることを言ひ過すことは難い。戰爭より生ずる結果のうち最も悲むべき一の事は、基督者の間に分裂を生じたことである。これは既に語つた所であるが、同一の神を拜すと稱へて居る人々が反對の側に立つて戰ひつゝあり、各々敵に勝たんことを同じ神に祈りつゝある。

疑もなくこれは一部分正直な誤解から生じた。人は敵の眞精神を知らず、誤解の爲めに誤つた方に導かるゝのである。

併しこれだけではない。戰爭が喚び起した言論を研究して見る時、我等は好みはせぬが猶ほ餘儀なく達する結論は、實の處其の拜する神に違

ひがあると云ふことである。基督者と稱ふる多くの人、基督を拜すると云ふ名の下に實は甚だ異なつた神を拜しつゝある。

戰爭の始まつた頃余は、一人の有名な神學者が戰爭の道德を論じた論文を讀んだ。彼は文中に論じて曰く戰爭は或る時機に於て國民の實力と其の政治的權力との間の均衡を回復さすため神の用ふる方法である。果して然らば如何なる戰でもあれ戰勝者たるものは、神の目的を成就し得る如き條件の下に、彼が獲得し得るものを盡く保持する義務があると云ふことになる。

此の論文は會々一獨逸人の手に成れるものであつたが、其の敎ふる哲學は或る國に限らず、何處にも辯護者を有するであらう。基督の主義は國家の事には有効でない、國際間の爭に最後の決定を與ふる者は力であるとなすとき、人は實に基督敎前の宗敎に遁れつゝある。彼等は基督の





名の下に「トル」や「オヂン」を拜しつゝあるのである。

我等は既に信仰に對して事實の提起する問題と交渉した。それは社會の進歩と云ふ一層大きい問題の一部分である。我等が觀た如く歷史は一直線に前進するものでない。退潮もあり、逆流もあり、失敗も逆轉もあるのである。神は長き歷史の過程を經て基督敎に到らするやうに人を訓練しつゝあつた。歩一歩、禽獸から人へ、アダムに於ける舊き人から基督に於ける新しき人へと導きつゝあつた。されば早い時代の痕跡は今も猶ほ殘存して居る。

我等は聖書に現れた此の敎育の歩趨に追隨することが出來る。基督以前には、人が戰爭と蠻行に活きた時代があつた。エホバは萬軍の神であり、イスラエルの諸軍の主であつた。彼はヨシュアをしてアイの住民を塵殺せしめ、アガグを活かして置いたと云つてソウロを責めた。神は復

仇よりも寧ろ悔改を好むこと、犧牲の愛によつて救ふことは漸次に學び得たる教訓である。

今日の人が舊約聖書の中のまだ進んで居らぬ考を記した文章を取つて自己の利欲や信仰缺乏の口實となし、基督が之を破壞せんとして來つたそのものを祝福するやうに基督に求むるを見るも強ち不思議な事でない。これは歴史上に於て幾度か起つた事である。ピウリタンが舊約聖書の倫理を揚げて新約聖書の倫理と同樣のものとしたのは其の一例である。我等は宗教裁判が個人的信仰の問題に干渉するに勸誘を以てせず力を以てした事實に之を見、戰鬪的なる羅馬法皇が絶對的從順を要求した事跡に於て之を見た。帝國主義は單に哲學でなくして、一種の宗教である、最古の宗教である、よし基督教の名を借り基督教の名の下に假裝しても帝國主義は依然として帝國主義である。





然らば如何にして此の形勢に對すべきか。此の惡靈を逐ふに足るだけの勢力は何處にあるか。其れは唯一つ、卽ち基督の靈あるのみ。一の理想と戰ふ武器は一層高等な武器であり、忠義心を征服すべき唯一の途はより强き忠義心あるのみ。

果して然らば我等の最も要する所は剛健なる福音である。慰藉を約束するだけでは足りない、救ひを說くだけでは足りない。戰爭は强きもの勇敢なるものに訴へる。其の報償は、名譽か、義務を果したりとの意識か、國家の感謝か、孰れにしても精神的である。我等にして是の如き奉公より人を移さんとせば、之と齊しき賞を懸けねばならぬ、卽ちより大なる光榮、より眞實な名譽、より高き義務、人類の感謝、これ等のものを揭げねばならぬ。安全第一は鐵道や貯蓄銀行には好標語であるかも知れぬが、國には適せぬ、教會には更に適せぬ。世界を征服すべき宗教は

戰鬪的宗敎であらねばならぬ。其の旗印として舊き戰に代る新しき戰を標榜せねばならぬ。

外國傳道は此の如き標語を敎會に供給する。外國傳道は冒險の精神に訴ふる宗敎の誘ひである。戰爭の氣分を帶べる基督敎であり、戰勝の爲に組織せられた敎會である。各人が萬人と倶に靈の最高なる祝福に與ることによりて人類の一致を實現せんとする努力である。全世界に行いて癒し且つ仕へる愛である。たゞこれのみでない。自由なる精神に訴へて、眞の自己となれ、長く囚へられた無知、怠惰、無頓着、不信の桎梏を破りて癒やすもの憂る者の隊列に加はれと促す愛である。

斯く定義すれば外國傳道は正しき遠近法を得るのである。それは孤立した事象でない、他の人事に交渉せずそれだけの事のために身を委ね得る事でない。是れは我等の時代の一特徵たる現代の社會的運動の一部分





であり、その最も重要にして意味深き一部分である。傳道は基督が据へた模型に則つて社會的秩序を改造せよと招く其の招誘に答ふる所以である。人類同胞の大義を信仰より事實に飜譯することである。

合衆國の內務大臣レイン氏は近頃亞米利加の精神を論じて米國人に平和を愛する精神を斯く解釋して居る。曰く『亞米利加の精神が戰爭に反對する所以は、我等が臆病になつて死を怖るゝが爲でなく、又輕薄になつて軟弱を愛するが爲でなく、我等が明な意識を以て回心し「平和の君」の臣下となつたと云ふ譯でもなく、亞米利加に居る我等は爲すべき更に大なる事を有して居るからである。我等は我等の國を發見しつゝある。一の木、一の池、一尺の土地も我等に挑戰する。山嶽は我等の敵である、我等は之を貫き、之を役せねばならぬ。我儘な河を撓め、地の生命を新にするものを空氣より海より得ねばならぬ。我等には戰爭する時がない、

戰爭よりも遙に重要な或る事を成しつゝある。我等は働いて居る。これが總ての冒險中の最大冒險である。』

これが米國人の品性に潜んで居る理想主義の眞の解釋である。米國人に取つて實業は單に金を作ることでない、それは困難に克つことである、障礙に對して力を測ることである、理想の型に照して世界を改造することである。

されども理想重疊たり。自然を征服するが偉い事であれば、精神を征服するは更に偉い事である。有形の宇宙を改造するが人間の功業でありとすれば、社會を改造するは更に人間の功業である。外國傳道の成立する所以は之が爲であり、之が爲に外ならぬ。

外國傳道の事業は個人に訴ふるを以て盡せりと考へた時代もあつた。あちらこちらに他の宗教から改信者を收め、之を組織して小團と爲し、





基督教の社會を之を環る異教の社會から別つ線を固く劃することが宣教使の事業と思はれた。

されど是等の時代は永く過ぎ去つた。外國傳道は新しき時期に移つた。個人に訴へる事の重要なるは今も昔に讓らぬが、我等は個人を新しい局面の上に於て見るのである。彼は我等が改造せんと欲する社會の一員であり、我等が征服せんと欲する國家の一市民である。我等が基督教化せんと試みつゝあるのは單に支那人でなくして支那であり、印度人でなくして印度であり、日本人でなくして日本であり、亞米利加人でなくして亞米利加である。此の目的を有する人にとつては、何事も無緣のものでない。一切の人事は直接我等の事業に關する故に、一切の人事が我等に興味を有するのである。教育、工業、商業、政治、其の外苟くも人と人との關係、國と國との關係に係はるものは宣教者の眼界の中に來り、彼

が着手した事業に關係を有して居る。故に大宣教使は單に說教家であるのみならず、政治家であり又た外交家であつた。マルチンは支那に國際法を與へ、ウォッシボルンは土耳其問題の主なる權威であり、歐羅巴の外交官に信ぜられた友人であり又た相談柱であつた。デフォレストは日本の善き精神を他國の人民に解釋した。

是は丈夫の事業に非ざるか。勝つべき障害を思へ。其處には人間の衝動の中最も古く、最も原始的なる私慾、卽ち取り得るものを取り、取りたるものを總て失はざらんとする衝動がある。我等は各人に潛んで居る更に大なる自我を現實にして私慾を我等の奴隷とすべきものである。基督の望む所は奴隷でなくして同勞者であり、我々が天國建設に於て人に與ふる事業は其の人の最も眞なる自我も亦最も深き滿足を得る事業であるといふ事は我等が人に示すべきことである。





事物の現狀に滿足し、改革の企に抵抗する心の習慣、惰力といふものがある。若し支那は開發せられざる富源の廣大なるが爲めに資本を投ずるに有利なる原野であるとして實業家に訴ふるなれば、況して基督者にはどうであらう。有益に用ひらるゝを待つて居る資力はどれほどであるか。我等若し今彼等を縛つてをる無知から彼等を解放し我等が之によつて自由を得たと同一の大なる機會を彼等の爲めに開きさへせば、親切、忍耐、堅固、忠義は如何ほどであるか。

自國の文明を最も善きものと思ひ、外來の感化を疑ふ偏見及び自然の傾向は孰れの國民にも免れ難い。此の如き態度に對するには限りなき手際を要し、一時のものと永久のものとを區別する明な判識力を要する。

今日は昔のやうになくなつたが、人の反抗心を喚び起すも無理ならぬ一種の傳道的活動がある。他國に行くもの。優者たることを自認し、異

りたる文明の中に育つた人々に其の國の歴史と何等接觸點なき風俗や理想を被ぶせやうとする時に反抗を受くるも無理でない。將來に於て此の誘惑に抵抗することが容易になつたのも戰爭の健全な副産物の一である。我等は基督教國といふやうなものはまだ無かつたことを前以て知るべき筈であつたと思ふ。外よりも長く福音の益を受けし國民、外よりも長く基督の保護に浴し、其の個人も亦た其の教訓により益を受けた國民はある。さればとて傳道區域の中にない國民は一つとしてない。今日印度や、暹羅に於て外國宣教使が出逢ふ困難は基督教の教師が國内に於て等しく出逢ふものである。内といひ外といひ其の區別は純然たる任意の區別である。其れは地圖の問題、宣教使の報告の問題である。宣教の種類は唯一つ、其れは基督教の宣教である、開拓すべき原野も唯一つ、其れは世界である。





傳道の計畫を此の大處に於て解釋する時に我等は其の遠大なる意義を量り知ることが出來る。是はたゞ一國民の事でなくして萬國の事である。教會の事でなくして苟くも人を愛する萬人の事である。小計畫の日は往いて復た歸らず。組織に對するには組織を以てするを要す。平和の時共に人道の爲めに盡すことにより、戰爭の緊張の來る時、我等を一つにし得る同情と信任の鎖は鑄らるゝのである。

此の高尚なる協同、調和の事業に與りて諸君、日本の教會は名譽ある役割を演ずることが出來る。諸君の國の内に有力にして分裂せざる基督教の模範を示し、基督教勢力の組織を助けることは諸君の力に待つ。我等西洋の傳説を承繼したものは、諸君の知らざる多くの障害の爲めに一となる計畫を妨げらるゝ。然るに基督教が比較的若き此の新土壤に於ては總ての基督者を合して共通の機會と共通の責任の意識を與へ、まだ分れ

て居る世界の基督者に一致した國民的教會の實例を與へ得るであらう。

此處にも亦た我等は內より始めねばならぬ。若し基督者が東京に於て相會し、主の基督に於ける兄弟たることを現はし得ずとすれば、日本全體に於て之を爲し得るを意識することが出來ようか。基督教協同の事業は、一地方の見地より見ても充分重大であるが、世界的の見地から之を見る時には更に重要なるものとなる。

**(四)最後の勝利の保證者たる活ける神**

斯くて我等は我等が出發した處に歸つて來る。此の大なる結果を可能ならしむる靈的空氣を作り出すべき個人の責任である。我等が斯くあるべき筈の人となるでなければ、我等の要求する教會も我等の來らさんとする世界も來ないであらう。如何にして我等は此の責任に對すべきか。





此の需要に應ずるに足る唯一の力の源がある、其れは卽ち神である。

余は我等の眼前に橫はる大事業を果す爲めに我等の活用し得る資力に就て語つた。戰爭によつて其が人間性に存するとの現はれた力、卽ち勇ましき忠義と我を忘るゝ犧牲の力、競爭、爭奪の目下の組織よりも更に善き世界を望む心、是等は我等の既に數へた所であるが、之に加へらるべき最も重大なる事實が殘つて居る。其れは卽ち活ける神自身である。我等は獨力世界の救を作り出すべきものでない。若し然らば我等は失望するかも知れぬ。是等の力を我等の裡に創造し、我等の心に是等の願望を置き給ふた神は、彼の計畫を成就せん爲めに親ら世界に活動しつゝあり給ふのである。

基督教が社會の進步に貢獻したものは樣々あるが、其の最も大なるものは活ける神を信ずる信念である。人類同胞の理想に於て基督者のみが

専有權を誇り得るものではない。苟くも何等かの世界主義を信ずる人ならば皆之に參與して居る。誤つて文明と呼ばれた現代の組織的私慾の狀態に慊らざる人、一層高く、一層寛濶なる生活の志を共にして居る他國人と共通の利害を認める人、國家主義や帝國主義の理想が人類を導く最後の言葉であることを拒み、眼前の事に失望しながらも共通利害を現はす徑路に從つて社會を改造せんとする望を有する人、要するに人類を其の一部分よりも更に大なりと觀て其の爲めに己が一生を捧げて居る人は何人に係はらず、其の主義に於ては今日の基督者が接する問題と同じ問題に接するのである。

此の如き人物が如何に多きかといふことを我等に示したことは目下の憾みを償ふるに足る。世界の基督者は少數の社會主義者の勇氣を尊敬する。彼等は交戰國の中でも最も帝國主義的な政府の下に立つて敢然人道





の爲めに辯じた。彼等は曾て宗教を捨てたのであるが、今や彼等の抗議を最も痛切に唱道する時には其の宗教の言葉を借り用ひた。我等は『フォルヴェルト』(Vorwärts) を基督教の機關と思はぬ。併し此の雜誌が和戰の議未だ決せざりし危機に於て獨逸の政府に呈した言葉は下の如くである。『我等は單に獨逸人であり、佛蘭西人であり、或は露西亞人であるのみならず、我等は皆人である、總ての人民は一つの血より出でたものであつて互に殺すべき權利を有せぬ。彼等は互に愛し助けるべき筈であるといふことを解せねばならぬ。是が基督教であり、是が人道に合へる行爲である。人は一國にのみ屬するものでなく人類に屬して居る。』(此の社說は獨逸政府の禁止する所となつたが秘密に流布せられて千九百十五年八月二十一日發行のサーヴェイ (Survey) に掲載せられた。)

此の大系に於ては同じ所に歸着するが、基督者は人生を宗教的に解釋

するが爲めに是が特別の力を帶びて來るのである。我等にとつては外の人を思ふことは唯人間の本能から來るでもなく、又た實際の便利から來るでもなく、宗教の信念から來るのである。人類が兄弟であるといふことは、神の子たることから自ら生ずる綱領であつて相互の補助、無私なる奉仕の原理によつて世界を改め組織せんとする事業は一個人の救の希望の基礎となれる救拯的の愛てふ第一の行爲から當然生じて來る。

余は反復する、基督教が社會進歩の爲めになせる最高貢獻は神の父たることを信ずる信念にある。我等は總て共通の事業に臨みつゝあるが我等の用ふべき資力の評價に於て見る所を異にする。或人は唯人間の要素のみを見るが我等は信仰によりて神の活動を見、智慧と力の盡きざる蓄積の上に最後の勝利の希望を置くのである。

要するに一切の事は信仰の上に懸つて居る。肉以上に充ち得る靈の力、





暗黑を散らし得る光の力、私慾を征服し得る愛の力、過去の桎梏より解脫し得る未來の力、之を信ずる信仰である。此の如き信仰の存する所、總ての事が可能であるが、是なくば意氣は阻喪し、努力は弛緩する。幻影なき所人は死する。

然らば基督者としての我等の第一事業は、人に存する神の意識を活かして保つことである。此の意識は危急の時に於て復活するは我等の見た所であるが、神を發見するに何ぞ危機を待つを要すべき、たゞ彼を見る目だにあらば戰の時に於ける如く平和の時にも神は近く又た近づき得べし。此の幻を與へるのが教會の本分である。事業中の最も大なる事業、責任中の最も重大なる責任は、信仰を養ふ學校たる教會の職分である。教會は我等の常に從事して居る正義の爲めの戰を常に我等の眼前に掲げねばならぬ。奉仕せよとの召命が始終我等の耳に響きつゝあることを想

起させねばならぬ。神を信じ、其の御用の爲めに險難を冒すを辭せざりし人々が既に得たる勝利の物語を次の代々に語らねばならぬ。一言にいへば如何なる計畫をも大膽に過ぎるとせず、如何なる企をも大に過ぎるとせざる翹望の態度を養はねばならぬ。

我等現代の基督者に勝りて此の信念を有し易いものがあらうか。我等は、指導せらるべき經驗なくして暗中に猛進したる信仰の開拓者の如く初めての問題に接するのではない。我等は基督の約束を試驗し、事實によつて信仰を是認したる實驗者の長き隊列の尾に續くものである。歷史を回顧すれば我等が今經過しつゝある暗黑に勝る暗黑の中に住つた人を懷ふ。而して我等は又た雲散じて後ち明けんとする新しき日の曙を既に見るのである。我等はカルバリイ山と其の暗き影を記憶するが又たイーストルをも記憶して神に感謝し勇氣を振ひ起すのである。





余は近頃パナマに遊び大運河を研究する特權を得た。余は想ふに是は自然に對し戰ふ人間功業の最大限度を示すものである。我等の思は佛蘭西の工業者が其の事業を始めし當初に歸る。此の如きは不可能であると公言せるあらゆる懷疑者に圍まれて尙ほ計畫の可能なるを信じた信仰は我等の驚嘆する所であるが、併し當時用ひ得べき資料だけからいへば疑ふ人の方が正しかつたといふことを思はねば未だ充分に彼等の信仰を見ることが出來ぬ。レセップスが掘り始めた時に用ひ得べかりし資料だけならば此の事は成就しなかつたであらう。然れども運河は出來た。何故であるか。それは當初には計算の中に加へてゐなかつた資料が出て來たからである。神は自然の寶庫の中に新しき力を豫備して居給ふ。それは科學が鎖されたる戸を一つ〳〵開く鍵を發見するに從つて此の新しき力が用ひらるゝやうになる。科學が之に接近し得るより前、信仰が豫知し得た

新しき力、此の力に未來は屬して居る。

精神的改造を圖る我等の事業に於ても其の通りである。科學に於ける如く宗教に於ても現在を以て未來を測ることは出來ぬ。若し我等が今持てるだけの資力に限られて居るとせば我等は失敗すべし、然れども神は慕るべき他の工人を有し、放つべき他の力を蓄へて居る。我等若し我等の本分を盡すならば、此等の成功が確實になる時が來り、世界が今猶ほ待ち望める新しき社會の秩序を來らすであらう。





# 追補（一）

第七十六頁第八行の終に左の數行を加ふ

英國の一兵卒は『フランダアスに於ける基督』と題する詩中に一層素朴なる形を以て同一經驗を歌ふた。

我等は汝を忘れたり、殆ど忘るゝばかりなりき。
汝はさまで我等に近く接するとは思はれざりき。
時々は我等も汝を思ひしことありき、
別けて苦しめる時にはしかありき。
我等は苦しめる時に汝が情ありしを知れど、
如何せん我等は凡夫なり。

常に考ふべき事他にありて、
人の考にのぼる事ぞ多かりける、
其の業、其の家、其の樂、其の妻など。
日曜日にのみ我等汝を思ひたり、
時には日曜日にさへ思はぬこともありき。
人生に滿つるもの常に樣々あればなり。

フランダアスにありて今ぞ我等汝を思ひ出づ。
フランダアスにて汝を思ふも不思議ならず。
物凄き此の戰、事物を明になすと思はる。
我等イギリスにあつてさまで汝を思はざりき。
イギリスを遠く離れし今、





我等に何の疑もなし。
我等知る汝が此處に在すことを。

## 追補（二）

一七一頁第六行「然るに一國内に於て」の上に左の數行を加ふ。

此の事が一般に認めらるゝやうになつたことは目下の時勢に於て我等を勵す徵候の一である。現在の如く國際的には無政府である狀態を此の上繼續さしてはならぬ。各國民が正義を基礎とした平和に眷々たる心を表現する或國際的組織がなければならぬ。而して此の組織たるや信用を得るだけ代表的のものであり、尊敬を博するだけ有力なものであらねばならぬといふ確信が諸方面より發表せられて居るを見る。

何をなすべきかを知ると之をなす方法を案出するとは必ずしも一でない。方法の點になると今日の形勢は未だ有望でないといふことを告白せねばならぬ。國民間の同盟を作る理想を贊成した人はある。世界の平和に關する事柄に於て一致の行動を取るやうに輿論を敎育する目的を以て種々の協會は設立せられた。然れども國家主義が各自國內にて運用し得ると同じ有効なる援助と强大なる資力とを世界主義の爲めに運用し得るほどの組織體はまだ一として存在して居らぬ。



大正六年四月廿五日印刷
大正六年四月廿八日發行

定價金八拾錢

譯者　柏井園

發行者　東京市京橋區明石町八番地　基督教輿文協會代表者　エス、エチ、ウエンライト

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　福音印刷株式會社

發行所　東京市京橋區明石町八番地　日本基督教輿文協會

發賣所　教文館・警醒社・丸善書店・岩波書店　基督教書類會社・

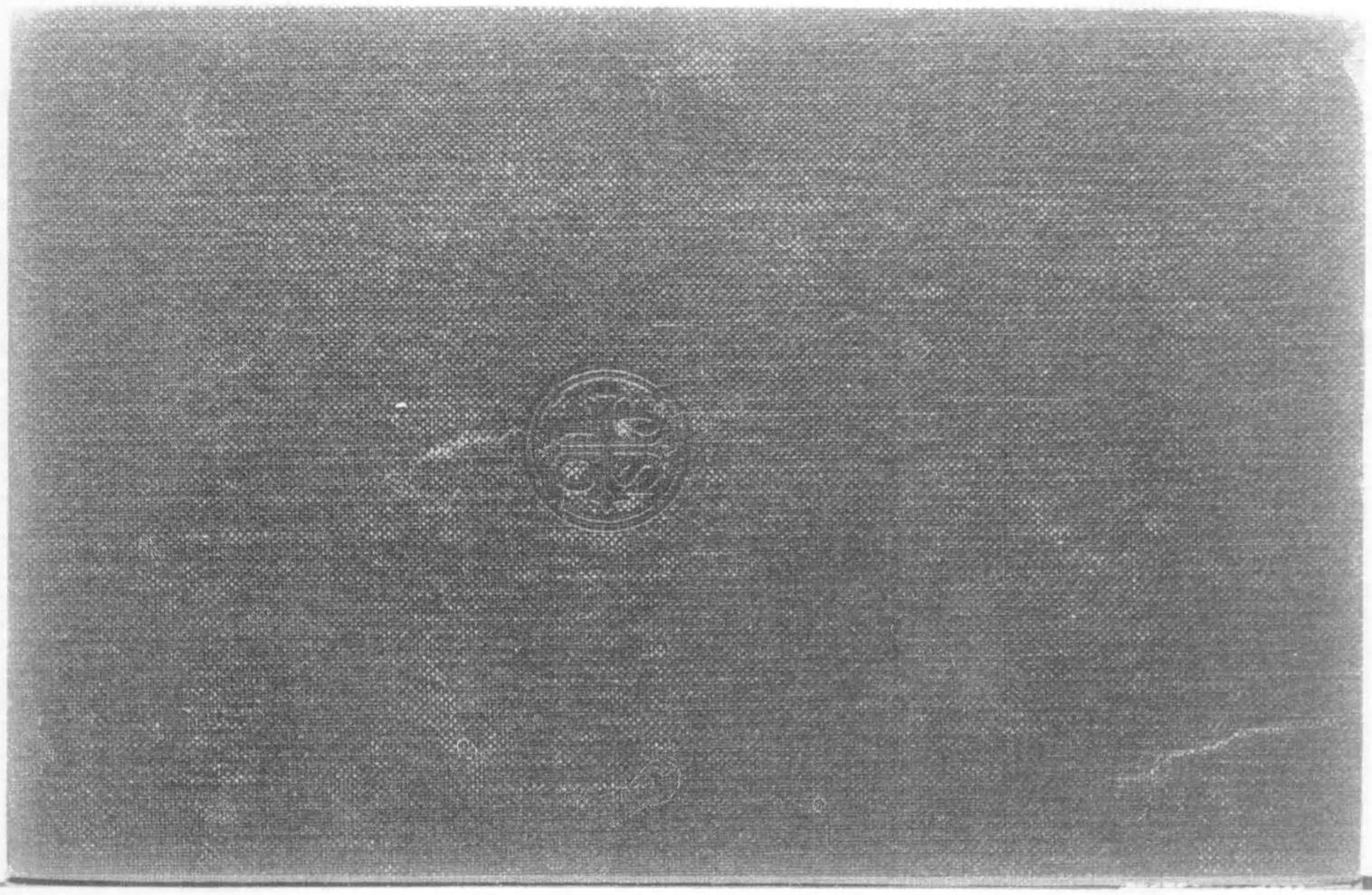
不許複製

アンダアソン著
柏井園譯
ナザレの人
定價壹圓

柏井園著
基督教史
定價參圓

シンプソン著
中澤正七譯
柏井園校補
人生の事實
並製五拾錢
上製七拾錢

325
487



終